

## 駆け出しの黒人女性作家 Paule Marshall と不遇の 1960 年代

阿部 暁帆

Also, the writer has to remain at all times true to her personal vision, even though it might not be in fashion this season. And another responsibility of the Negro writer — of any writer, for that matter — is to tell her story with eloquence, and according to the highest literary standards. (Marshall, “The Negro Woman in American Literature” 24)<sup>1</sup>

### はじめに

現代黒人女性作家の草分け的存在とされる Paule Marshall が執筆活動を開始した20世紀半ばのアメリカ社会では、公民権運動が俄然勢いを増しつつも、女性に対する社会的意識は依然として希薄であり、そうした状況のもとで、彼女の作家としての幕開けは華々しいものではなかった。<sup>2</sup> 1970年代以降になると、ブラック・フェミニズムの潮流によって彼女の作品もようやく再評価の対象となるが、それでもなお、同年代の Toni Morrison といった著名な黒人女性作家と比較すれば、彼女は遍く人々に知られることはなかった。

ところで、黒人女性作家台頭の時期に刊行された作品群を顧みると、フェミニズムや多文化主義など、当時の社会運動が色濃く反映されたものも多く、そうした特徴が作品に対する評価とも深く関係していたことを、今更ながら認識させられる。一方で Marshall の作品は、そうした特色が際だっているとは言いがたいが、果たしてそれだけの理由で一蹴されてしまったのだろうか。そうした疑問を解くには、彼女が小説家として名声を確立していくはずであった1960年代に手がかりがあるように思われる。この時期の Marshall は、作品の執筆のみならずヨーロッパやカリブ地域を訪問するなど、創作に関わる活動を精力的に行っていた。そして、*The Chosen Place, the Timeless People* (1969) もその成果の一つといえるのであるが、実は本作品が刊行された60年代のアメリカ黒人社会は、公民権運動から「ブラック・パワー運動 (Black Power Movement)」への移行期を迎えていた。従って、本作品出版の背景にあった当時の黒人文化芸術の風潮を意識するとともに、Marshall

や彼女の創作に対する社会的評価にも留意することが重要である。更には、カリブ系二世である Marshall が、アメリカ黒人女性作家としてどのような位置づけにあったのかについても確認する必要があるだろう。

彼女の作家としての活動の発端には、専ら彼女自身が巡り会えなかった黒人小説、すなわち先入観にとらわれない、黒人女性のありのままの姿を描くという意義があった。その目的のために、Marshall は従来の固定化された黒人女性像に関して先行的な分析を行い、そうしたイメージから脱却するための小説を創作することに注力した。だが、結論からいってしまえば、当時の黒人文化芸術の世界において Marshall に対する風当たりは強く、こうした努力も実のところ、厳しい評価の下では見過ごされてきたのであった。つまり彼女にとって 60 年代は、作家として最も不遇の時代であったといえるのではないだろうか。本論では、*The Chosen Place* が出版当時どのような扱いを受けていたかを詳らかにしたうえで、従来黒人女性描写に関する Marshall の的確な指摘と、イメージ払拭のために登場人物と向き合う彼女の姿勢にも焦点を当てたい。そのためには、作品とあわせて 60 年代黒人文学研究や Marshall の著作、対談録等を取り上げて考察することが、より効果的であろう。

## 不寛容な空気

1920 年代に全盛を迎えたアメリカ黒人による文化芸術運動は「ハーレム・ルネサンス (Harlem Renaissance)」として有名であるが、それに倣って「セカンド・ルネサンス (Second Renaissance)」と呼ばれるほど、1960 年代もまた、アメリカ各地で多くの黒人作家の才能が花開いた時期であった。<sup>3</sup> 60 年代も中頃になると、そうした動きは「ブラック・パワー運動」と密接に関連した政治目的意識の強い「黒人芸術運動 (Black Arts Movement)」へと集約されていく。

Marshall は、作家活動に先駆けて、急進的な政治活動にも早くから積極的に参加しており、人種問題に関する主張は、もちろん作品の諸処に反映されている。<sup>4</sup> 例えば *The Chosen Place* の最後で、主人公のバルバドス黒人女性 Merle は、Saul がアメリカへ戻る直前に次のような言葉をかける。

“Where they treat the black people, the very ones who made the bloody country rich in the first place, so badly; a place where, oh, God, [. . .] you

read in the newspaper sometime back how they bombed a church killing four children, four little girls now the age of my daughter; and where, every time you look around, they're warring against some poor, half-hungry country somewhere in the world . . ." (469)

彼女は、具体的に1963年にアラバマ州バーミンガムで四人の黒人少女の命が奪われた教会爆破事件を挙げ、アメリカに根強く残る黒人差別と国家としての野蛮さを批判する(469)。<sup>5</sup> 本作品は、議論されるべきテーマが多岐にわたっているものの、大半の黒人小説と同様に、人種差別撤廃という理念が作品の根底に流れている。なかでも *The Chosen Place* は「黒人芸術運動」の絶頂期に出版されたにもかかわらず、日の目を見ることはなかったのは何故なのだろうか。相応に批評がなされている彼女の処女作 *Brown Girl, Brownstones* (1959) や後の *Praisesong for the Widow* (1983) と比較すると、本作品に関する研究は少なく、また物語紹介程度のもものがほとんどである。

そこで、本作品が多彩な題材を扱ったこととは反比例するかたちで、その刊行は「黒人芸術運動」が排他的傾向を帯びていった時期と重なっていた、という事実と照らし合わせて考える必要が生じる。当時、既に黒人文学について研究を行っていた Robert Bone は、黒人作家がどのような苦境に置かれているかを次のように指摘していた。

He [The Negro novelist] is under constant pressure from Negroes who are committed to the propaganda novel, from publishers who traffic in racial sensationalism, and from professional liberals who need a cause to defend. In art, as in life, he is not allowed to transcend his category. (247)

当時の黒人小説家たちには、自由な創作活動が保証されていないばかりか、一部の政治的な意図をもつ黒人や売り上げを狙った出版社から絶えず圧力がかかっていたことがわかる。その個々の事例として、あくまで個人主義を貫いた Ralph Ellison が1960年代以降批判に晒されることになった理由を、荒このみは次のように説明する：

かれら組織・グループ [政治的党派や文学的なグループ] の人間は、そ

してとりわけアメリカの黒人社会は、全米的な知名度を獲得し、白人社会で認められるようになったアフリカン・アメリカンに対して、黒人社会のスポークスマンになることを期待する。すべて一丸となって、黒人社会とともに行動することを当然の義務として要請してくる。それに従わなければ黒人社会の一員と見なされないばかりか、反逆者のごとくに扱われてしまう。(44)

こうした黒人文学界の風潮は、具体的にどのような状況にあったのだろうか。先にも述べたように、当時は、「ブラック・パワー運動」と相關的な関係にあった「黒人芸術運動」が隆盛を極めていた。なかでも、その中心的な役割を担った Amiri Baraka や Larry Neal らが唱えた「黒人美学 (Black Aesthetic)」は、従来の主流の文学とは対極的に黒人の自発性や自主性を尊重したものとして今なお高く評価され、その後の黒人の創作にも大きな影響を及ぼしてきたといえる。しかしながら、その革新的な主張の反面、現在では「特定の政治的主張の作家への押しつけや政治的主張による検閲的行為、男尊女卑的な考え方、反ホモセクシュアル、反ユダヤ主義等が批判されている」(加藤 126)。<sup>6</sup> 当時、黒人の急進勢力が追求する政治目的にそぐわない芸術活動が非難に晒されていたばかりか、白人男性社会への対抗意識から黒人のマスキュリニティが賛美されることで、「黒人芸術運動」は排他的側面を併せ持つこととなり、とりわけ同性愛や女性の権利といった内容が含まれるものは攻撃の対象にすらあったのである。<sup>7</sup>

Barbara Christian は “The Race for Theory” において、黒人文学やフェミニズムといった理論がそれぞれに画一化されようとすることや、作品に対する一方的な理論の強要を懸念し、例えば次のように述べている。

Since I can count on one hand the number of people attempting to be black feminist literary critics in the world today, I consider it presumptuous of me to invent a theory of how we ought to read. Instead, I think we need to read the works of our writers in our various ways and remain open to the intricacies of the intersection of language, class, race, and gender in the literature. And it would help if we share our process, that is, our practice, as much as possible since, finally, our works is a

collective endeavor. (13, underlines mine)

ここでは、読み手は作品を一つの理論に関連づけようとするべきではなく、また、各の様々な読み方を共有することの有用性が説かれている。従来の思想や理論と対峙するためには、それらがある程度一貫性をもつことはやむを得ないだろうが、過度に方向性が単一化されることで、範疇から外れたものに対しては不寛容な態度がとられることが危惧されているのである。そして「黒人芸術運動」においては、*The Chosen Place* の言語使用のあり方を巡ってでさえ、偏狭な見方に基づいて批判の対象とされたことに言及したうえで、Christian はこう指摘する。

Because the ideologues, like Baraka, come from the urban centers they tended to privilege their way of speaking, thinking, writing, and to condemn other kinds of writing as not being black enough. Whole areas of the canon were assessed according to the dictum of the Black Arts Nationalist point of view, [ . . . ] while other works were ignored because they did not fit the scheme of cultural nationalism. (18, emphasis added)

つまり、作品内で十分に黒人らしさが表れているとはいえない、あるいは黒人の文化的ナショナリズムに合致しないものは、非難されるか無視されてきており、*The Chosen Place* もそうした作品の一つであったことが指摘されているのである。

1965年、MarshallはLangston Hughesに伴ってアメリカ政府主催のヨーロッパへの文化交流プログラム旅行に参加した。創作当時の状況などが含まれた自身の講義録 *Triangular Road: A Memoir* (2009) において、Marshallは20世紀の激しい人種差別撤廃運動に携わり続けたHughesを賞賛している。例えば、本プログラムの議論の場において、Hughesが若手のイギリス黒人たちに、自由獲得の闘争は今や世界中の有色人種全体の問題であると講じたり、運動の実情や教科書には記載されることのない黒人の歴史をMarshallに教えたりしたことなどが回顧されている(21-22, 28-29)。Hughesとの親交から刺激を受け、またカリブ地域にも複数回滞在したMarshallは、アメリカ国内の人種問題にとどまらず、黒人当事者として地球規模での諸問題に対し、どの

ような役割が担えるかについて思考を巡らせていったのであった。<sup>8</sup> その結果として *The Chosen Place* で取り上げられたテーマは、カリブ黒人女性 Merle とユダヤ系アメリカ人男性 Saul とのディアスポラを通じた情愛をプロットの主軸として、ポストコロニアルな状況での複雑な人間模様や途上国開発支援事業の難しさ、様々なかたちの同性愛など、今なお解決しがたいものも含めて枚挙に暇がない。ちなみに Marshall は、本作品の創作に対する当時の姿勢について、以下のように回想している。

What I had in mind was something of a historical novel, although not in the strict sense of that genre. It would be set in the present, the characters would be modern-day folk of various races and backgrounds, yet their lives, their situations, their relationships, their thinking and politics would reflect the past four-hundred-year history of the hemisphere and its continuing impact on them. (*Triangular Road* 126, emphasis added)

Christian が指摘した、一つの理論のみに基づいて読み解くことの不適当さは、作品の構想に関するこうした Marshall の説明にも垣間見ることができる。駆け出しの作家 Marshall は、黒人の枠を超えて、長きにわたり迫害を受けてきた世界中の人々による相互的な共感や直面している数々の問題を題材に、壮大なスケールの小説を執筆しようと試みたのである。

ただしこうした多様なテーマこそが、「黒人芸術運動」においては障壁と捉えられたのであろう。先の Christian による指摘は、次のように続く。

Older writers like Ellison and [James] Baldwin were condemned because they saw that the intersection of Western and African influences resulted in a new Afro-American culture, a position with which many of the Black Nationalist ideologues disagreed. Writers were told that writing love poems was not being black. Further examples abound. (18, emphasis added)

こうした事例に照らし合わせても、小説の舞台がアメリカ国内ではないうえに、カリブ黒人女性とユダヤ系アメリカ人男性との交流、更には情愛を扱っているという点で、*The Chosen Place* が非難を浴びた可能性は想像に難くな

い。「黒人芸術運動」の理念を下支えしない要素として無視されるばかりか、「黒人美学」の追求という目標を揺るがすような作品展開は認められなかったのであろう。こうして本作品は、Bone の指摘したように黒人勢力の反感を買い、また Christian の言及にあるとおり、ブラック・ナショナリストの理論家の多くが賛同しない芸術作品とみなされてしまったのである。刊行時のアメリカ黒人社会の反応については、Marshall 自身が次のように吐露している。

It took me a long, long time to research and write, but the success just didn't happen because it came out at the wrong time. It was vilified; a book that dealt with an interracial relationship, oh my, people got negative! Larry Neal! All they saw through their very narrow lens was this one relationship in the novel. And yet that book is still being taught. But there was a resistance that was brought on by the time — certainly by the black intelligentsia. That there was an interracial relationship in the book was just insupportable to them, so they didn't even deal with the real meaning of the novel. (Hall and Hathaway 179-80, emphasis added)

異人種間の関係を扱っているという点で、本作品が当時の黒人知識人から酷評されたこと、更には、作品が総体的に扱われていない点についても Marshall は心を痛めている。Merle と Saul の情愛は、ディアスポラに翻弄され心に傷を負う者同士が、互いに過去を消化したうえで未来に向かうという、あくまでも大きなプロットの一部である。だが、芸術運動の主流派には、人種混交があたかも作家の主たる目的であるかのように受け取られたようである。黒人の魅力を謳い自立性を讃えるという「黒人芸術運動」の主旨からすれば、そもそも人種の枠を超えた相互理解というかたちそのものが、否定されざるを得ないであろう。加えて、「男尊女卑的な考え方、反ホモセクシュアル、反ユダヤ主義」といった「黒人芸術運動」の排他的側面を考慮すれば、女主人公 Merle の人間としての魅力や調査員 Allen の島の青年 Vere に対する同性愛的な感情、そしてユダヤ系の Saul の苦悩と努力といった描写もまた受け入れられ難いものであり、創作の真意に迫るには程遠い状況だったのである。このように、当時の「黒人文学」の域を超えた *The Chosen Place* の刊

行は、少なくとも当時の黒人文学界では極めて時期尚早であり、黒人文学における多様性の一つとして受け入れられないままに敬遠されてしまったのである。

### アメリカとカリブの「架け橋」として

Marshall の知名度が上がらなかったもう一つの理由は、彼女がアフリカ系アメリカ人作家に、単純には分類され得えなかったことと関係する。その主な要因は移民二世という特殊な生育環境にあって、彼女の両親は 1920 年代にバルバドスから移り住み、彼女が生まれたのは、バルバドス移民が暮らすブルックリンのベイジャン (Bajan) コミュニティであった。彼女自身の幼少時代の日常が綴られた “From the Poets in the Kitchen” では、“This is why the best of my work must be attributed to them [ordinary housewives and mothers]; it stands as testimony to the rich legacy of language and culture they so freely passed on to me in the wordshop of the kitchen” (12) という結びの文章に象徴されるように、政治や経済、移民としての苦労話からアフリカ的な表現も踏まえた比喩や格言に至るまで、台所に集うバジャンの女たちの様々な会話を具体的に取り上げたうえで、それらを聞くことによって作家としての素養が培われたことが説明されている。また、幼少時こそ意識しなかったが、成長するにつれてベイジャンとアフリカ系アメリカ人との間の英語の発音の違いや気質の違い、両者の対立に至るまで様々な相違点に気づくようになったと彼女は振り返る (Pettis 84-85)。このように、ベイジャン・コミュニティやカリブ地域の文化性が、自然と作風に影響を与えることとなったのである。<sup>9</sup>

だが Marshall は、そうした特殊性を認めながらも、西インド諸島特有のものとはアメリカ社会に由来するものという、各の文化的要素をあえて別々のものと見なしたことはなく、「『二元的』 (“dual”）」 (Russell 78) という表現は避けたいと主張する。更に彼女は、アフリカ系アメリカ人と西インド諸島人双方から、作家はいずれかのコミュニティに属するべきであると非難されたことを告白し、“Americans need categories for the artist so they can perhaps better understand and thus control you” (Graulich and Sisco 147) と指摘したうえで、“I dislike the categorization. I dislike the pigeonholing” (Hall and Hathaway 171) と嫌悪感を露わにしている。<sup>10</sup> というのも、彼女が望んだ役割はアフリ



カ系アメリカ人と西インド諸島人という “a kind of bridge that joins the two great wings of the black diaspora” (Dance 109) だったからである。<sup>11</sup>

ただし、彼女は「架け橋」としてブラック・ディアスポラを意識しつつも、アフロ・セントリズムやブラック・ナショナリズムのように、積極的にアフリカへの回帰を求めたわけではなかった。なぜなら、彼女は親族の多様な生き方を人生経験として受け入れ、黒人の理想と現実、また時に妥協する必要性を学んだからである。彼女の母方にはより良い暮らしを求めて貧困のバルバドスから欧米に渡った親戚が多くいる一方、海外へ移住すべきとの祖母の意に反して伯母の一人はバルバドスに留まり、行商人として生きることを選んだのであった。更には、夢を追い続けた挙げ句、当時アメリカ黒人社会で席卷していた新興宗教に心酔し家族を見放してしまう父親の姿を、Marshallは目の当たりにしたのである。<sup>12</sup>

このような、地理的な移動に伴う心理変化を描いた彼女の作品には *Praisesong for the Widow* が挙げられる。この作品では、アメリカからカリブ地域への移動と並行して主人公 Avey の心情の変化が描かれているが、ほぼ同時期に出版された Morrison の *Tar Baby* (1981) においても、同様にアメリカ、カリブ地域間の移動と、それに伴う登場人物の心理的变化が描かれている点は興味深い。前者では、主人公のアメリカ黒人女性が、伝統文化を尊重する生活もしくは中産階級へと駆け上がる生活、いずれかの選択肢しかなかったことをカリブの島で回顧する様子が描かれているが、後者においても、カリブでの生活と対照させることによって、アメリカ黒人社会における柔軟性の欠如が描き出されている。カリブの島で恋人関係となった黒人の Jadine と Son が、帰国したアメリカでは互いの属する両極端な社会に対して相容れなかった結末は、アメリカ黒人社会におけるそれぞれの主義主張の隔たりと、それらを調和させることの難しさを象徴しているといえよう。<sup>13</sup> 例えば近年では、Paul Gilroy が「われわれ自身の文化を学んだり理解したいと思ったならば、われわれはそこから少し距離を置くことが必要」(市田 145) であると主張している。だが、当時そうしたグローバルな視野をもつことが可能な黒人はまだ少数派であり、大多数にとって当面の問題はアメリカ合衆国内部にあって、その範疇で人種問題に関わる論議を続けざるを得ない状況に置かれていたのである。

一方、Marshall はアメリカ生まれではありながらも、世界中で様々な経験

をした親族の人生に黒人や移民として生きることの難しさを学び、新たに何かを獲得しようとするれば他方で保持していたものを失う危険性さえあることを、十分承知しているようにみえる。特に *Praisesong* の結末は、そうした教訓を踏まえた Marshall 独自の解決策を反映しているといえるだろう。カリブ地域という異なった風土を理解することもないままアメリカへ戻ったり、逆に違和感のあったアメリカでの生活を捨ててカリブ地域に永住したりするのではなく、Avey が歴史継承の意義を実感し、休暇には孫たちに昔話を聞かせようと決意してアメリカへ戻るところで物語は締めくくられている。身近な人々の多様な生き方から実理を悟った Marshall は、作品においても特定の思想に傾倒するのではなく、アメリカ黒人社会の手詰まり感にカリブという外部の風を吹き込むことによって、ブラック・ディアスポラの視点を活かした作品を生み出したのである。<sup>14</sup>

Marshall は、バルバドスやグレナダでの長期滞在中に、初期作品の推敲や資料収集を行うとともに、後に発表された小説の着想についても、多くを島での体験から得ている。バルバドスの著名な詩人 Edward Brathwaite は *The Chosen Place* について、“Had Paule Marshall been a West Indian, she probably would not have written this book. Had she not been an Afro-American of West Indian parentage, she possibly could not have written it either” (226) と述べて評価している。公民権運動に参加できなかったことに Marshall は後ろめたさを感じているが、その時期にアメリカ本土から離れ、もう一つの故郷であるカリブに身を置いていたからこそ、「アメリカ黒人文学」の領域を超えるような作品を創作することが可能だったのであろう。また逆にいえば、様々な社会運動が芽生え始めていたアメリカ合衆国で生まれ育ったからこそ、当時は女性運動への関心が薄かったカリブ地域についても、早々と女性の視線で考察することができたのである。つまり、アメリカとカリブ双方での彼女の経験が融合することによって、Marshall の求めた「架け橋」となる作品が生み出されていったのである。

グローバルな視野での問題提起やカリブの文化的特性が活かされた Marshall の小説は、しかしながら、不幸にも当時席卷していた「黒人芸術運動」の排他的風潮に掻き消されてしまった。Marshall の幼少時、台所に集っていた母親とその友人たちについて、彼女は次のように思い返している。

My mother and her friends were after all the female counterpart of Ralph Ellison's invisible man. Indeed, you might say they suffered a triple invisibility, being black, female and foreigners. They really didn't count in American society except as a source of cheap labor. But given the kind of women they were, they couldn't tolerate the fact of their invisibility, their powerlessness. And they fought back, using the only weapon at their command: the spoken word. (“From the Poets in the Kitchen” 7, emphasis added)

黒人であり女性であり、更には移民でもある母親たちは、労働力としてしかその存在を認められず、せめてもの反抗として台所で言葉を発していたと Marshall は述べている。だが、娘である作家 Marshall もまた、“invisible man”を生み出した後に黒人文学界で矢面に立たされた作家 Ellison の「女性版」となってしまったのである。Marshall の場合は、母親たちの井戸端会議から創作という手法に換えて言葉を発したのであるが、ベイジャンとしての文化的特性を含んだ作品も、黒人文学がもつ多様性の一環としては認められないという不条理な状況に置かれたのであった。彼女よりずっと以前にカリブを旅した、民俗学者であり黒人社会を女性の視線から闊達に描いた作家 Zora Neale Hurston が、この時期には世間から忘れ去られてしまっていたのも、こうした世相があったからかもしれない。

「黒人芸術運動」における男性支配 (male supremacy) やジェンダー抑圧 (gender oppression) の問題は、1970 年代のブラック・フェミニズムの開花へと繋がっていく。後に発表された *Praisesong* は、黒人女性のアイデンティティの尊重やアフリカの文化への回帰といった作品のテーマと、そうした時勢が合致したことで、彼女の作品のなかでは最も多く論じられることとなった。しかし、必ずしも Marshall が時流に合わせたというわけではない。従来文学作品に描かれてきた負の黒人女性像は、彼女にとっては以前から常に大きな課題だったのである。「黒人芸術運動」の波間に消えてしまった Marshall の 60 年代の活動には、実は、従来黒人女性像に関して先駆けてなされた問いかけと、それらを打破するための試みがあった。

### 従来の黒人女性像とは

早くから社会活動に関心を抱いた Marshall は、司書や母親が呆れるほど図書館へ通い詰めた文学少女でもあった (*Triangular* 85)。ただし、例えば Alice Walker が “Mindful that throughout my four years at a prestigious black and then a prestigious white college I had heard not one word about early black women writers, one of my first tasks was simply to determine whether they had existed” (9) と述べているように、Marshall も幼少期から高校に至るまで、学校教育においては黒人女性文学どころか黒人作家の作品すら読む機会がなかったことを振り返っている (Bröck 59-60)。けれども、彼女はそうした状況のなかで、作家が黒人であるかの如何に関わらず、あらゆる文学作品において黒人女性がどのように描かれているかについて分析したのであった。*Freedomways* に掲載された “The Negro Woman in American Literature” では、小説における従来の偏った黒人女性像について明瞭な指摘がなされているので、やや長いが引用しながら考察していきたい。<sup>15</sup>

I contend that, by and large, the figure [ . . . ] is a myth, a stereotype, a fantasy figure, which has very little to do with the Negro woman in reality. In other words, the black woman as portrayed, has suffered the same unhappy fate as the black man. She has in a sense been strung up on two poles and left hanging. (20)

Marshall は、まず、黒人女性たちが現実レベルで扱われることはないに等しく、常に不幸な人間像としてしか描かれていないとも指摘する。そしてそれは、次のように両極端なものであるという。

At one end of the pole, there is the “nigger wench” —sensual, primitive, pleasure-seeking, immoral, the siren, the sinner. [ . . . ] At the other end of the pole, we find that larger than life figure, the Negro matriarch, who dominates so much of fiction— strong, but humble, devoted, devoutly religious, patient — a paragon of patience, if you will — wise beyond all wisdom, the saint, the mammy, the great wet nurse of the society, and the country deep within the recesses of its psyche longs to return to her ample

breasts. (20)

二つの対照的な黒人女性像とは、端的にいえば、「黒人のふしだらな女—好色で、粗野な、快楽を追い求める、不道德な、妖婦や不信心な者」、あるいは「黒人の女家長—たくましくも慎ましく、献身的で、信仰に厚く、忍耐強い」のいずれかに分けられると彼女は分析している。

Now, I am not saying that there is anything wrong in writing about sinners or saints, matriarchs or wenches, black or white. All is grist for the novelist's mill. But what is wrong, glaringly and inexcusably wrong, is that the Negro woman as a character in the fiction, has been confined largely to these two categories. Moreover, to compound the crime, she is seldom realized as a valid character in these two categories; by this I mean she is denied the complexities, the contradictions, the ambiguities that make for a truly rich and credible character in fiction. (20-21, emphasis added)

Marshall は、先に挙げたような黒人女性の人間性を描くことそのものを頭ごなしに否定してはいない。そうした人間像もまた小説の素材であるとしている点は、人物の多様性に重きを置いている彼女の寛容さであろう。だが、彼女が強く非難するのは、黒人女性がこうした両極端なイメージのいずれかにほぼ固定化されているということである。そして、いずれかのタイプで描かれるがために、小説の黒人女性像には、「人間としての複雑さや自己矛盾、曖昧性などが与えられず、故に真に豊かな人間性が描き出されていない」ことを Marshall は嘆いている。彼女が挙げたこうした二つのステレオタイプは、後に Patricia Collins がブラック・フェミニズムにおいて類別した、他者化された黒人女性のイメージである「ジェゼベル (jezebel)」、および「マミー (mammy)」や「女家長 (matriarch)」の性質と重なるものであり、Marshall はかなり早い時期に、従来のコントロールされた黒人女性像について分析したといえよう。

黒人の暮らしが描かれた、例えば Richard Wright のような作家を読むようになってからでさえも “I was yet having the sense that my particular experience as a young urban Black American woman was not really being dealt

with in that literature” (Bröck 60) と Marshall は述べている。ここで、代表的な黒人文学作品を彼女の主張と比較してみよう。そもそもアメリカ黒人による最初の小説とされる William Wells Brown の *The President's Daughter* (1853) に登場する黒人女性は、色の白い母親に始まり、クアドルーン (quadroon) の主人公 Clotel や白人の子供にも劣らず白い娘 Mary など、当時の黒人女性を表象するとは言い難く、かつ第三代アメリカ大統領 Thomas Jefferson の血を引く奴隷という特殊な設定である。小説では、随所で白人女性にも引けを取らない肌の白さや容姿の魅力、善良な性格が強調されることによって、奴隷制度の不条理が説明されていく。だが、人生を自ら選択できない彼女たちは悲劇のヒロインでしかなく、Marshall の言葉に照らせば「慎ましく、献身的で」、「実際の黒人女性とほとんど無関係な」 「幻想的な人物」であり、白人女性に嫉妬される姿は「ジェゼベル」的側面すら担っているといえる。

そして、それから一世紀近く後に発表された Wright の *Native Son* (1940) においても、黒人女性 Bessie は悲劇の脇役に過ぎない。主人公の黒人青年 Bigger から共犯を迫られた場面では、恋人 Bessie が次のように嘆く。

“Bigger, please! Don't do this to me! Please! All I do is work, work like a dog! From morning till night. I ain't got no happiness. I ain't never had none. I ain't got nothing and you do this to me. After how good I been to you. Now you just spoil my whole life. I've done everything for you I know how and you do this to me. *Please, Bigger. . . .* [ . . . ] Lord, don't let this happen to me! I ain't done nothing for this to come to me! I just work! I ain't had no happiness, no nothing. I just work. I'm black and I work and don't bother nobody. . . .” (169-70, underlines mine)

Bessie によって発されたこの台詞は、まさに Marshall の指摘した象徴的な従来の黒人女性像を表している。母親は社会では労働力としてしかアメリカ国民の一員とみなされていなかったと Marshall が指摘したとおり、Bessie は使役犬のように受動的に働くのみである。<sup>16</sup> 更には、Marshall が従来の黒人女性像に共通する特徴として “the same unhappy fate” を背負っていると述べたように、黒人男性に尽くすはずの存在でしかない Bessie は決して幸せになるこ

とを許されず、社会に対してはその存在を疎まれないように声を潜めて生きていかざるを得ない。このように Bessie の言葉は、非常に消極的、犠牲的な黒人女性像を作り上げているといえる。つまり彼女が嘆けば嘆くほど、精神的な弱さや黒人男性に依存せざるを得ない状況が誇張されてしまうのであって、若い黒人女性の実像が描かれていないと Marshall が首を傾げるのも当然であろう。こうした Bessie 発言は、続いて “he [Bigger] knew the truth of all she spoke without her telling it” (170) という Bigger の心情が綴られることで、ますます客観的で真実味を帯びることとなり、ついに悲劇的な黒人女性像が完成させられてしまうのである。その後 Bessie は Bigger に殺害されるが、Morris Dickstein はこうした展開を、“When Bigger kills her, it’s his most gratuitous and senseless act, though typically ignored by everyone else in the book, who attend only to the white victim” (171) と断言している。これはやや単純化した見方かもしれないが、極端にいえば Bessie は Bigger のみならず、白人女性 Mary 殺人事件という主要プロットの「引き立て役 (“complementary”）」(Smethurst 87) に過ぎないのである。こうした黒人女性に対する侮蔑的な扱いは、抗議文学から「黒人芸術運動」へと時代の変遷を経てもさほど変わっていないようにみえる。例えば、当時の黒人芸術家たちのソフトボール試合には男だけが参加でき、一方で女たちはサイドラインにとどまって、夫やボーイフレンド、男友達を応援しなくてはならなかったという回顧録に象徴されるように (Smethurst 86)、黒人女性は依然として黒人男性の “complementary” ほどにしか、みなされていないのであった。

### リアリティーの追求

このように、黒人女性描写に対する疑問は、Marshall の創作意欲へと繋がっていくこととなったが、自らが小説家として提供できる作品の可能性について、彼女は次のように語っている。

I can provide an antidote to the unflattering and negative images of black women that have persisted in the literature and the society, and I can also offer young black women — such as myself at the earlier period, who had no models, who never saw herself reflected — a more authentic image of themselves. I see that as very overpowering, because once you see yourself

reflected truthfully, and that means not a flattering portrait, but with the warts also, it permits you to feel that you have a right to “be” in the world. We begin building an internal strength within our communities, because we know who we are. (Baer 120-21)

長きにわたって作り上げられてきた、偏った黒人女性像を払拭するために、Marshall はコミュニティに生きる黒人女性の姿について、リアリティーを追求しようとしたのである。彼女の小説が自伝的であるとか、あるいはセンセーショナルな作品ではないと早々に片付けてしまうのはやや早まった解釈であって、黒人女性の実像を表現するためにこそ、Marshall は自身の経験や周囲の人々の実状をモチーフの一つとして描写したともいえるのである。こうした想いを実際の創作に繋げるために、彼女は手始めとして黒人少女の成長物語や、若い黒人女性たちが自主性に目覚める物語を執筆していく。そして続く 60 年代以降には、中年期の黒人女性を主人公に据え、彼女たちの複雑な心理を描くようになる。

更に、ステレオタイプの黒人女性像からの脱却という Marshall の試みは、人物の年齢や立場等の設定のみならず、黒人女性を描く際の力点や背景となる題材の取り上げ方にもみられる。黒人女性たちがコントロールされ抑圧される立場に置かれてきたのは周知の事実でありながらも、被害者的な姿に描きあげるのではなく、彼女たちの自発的な態度を作品の軸に据えることで、本来備わっているポジティブな要素を描き出しそうとしたのである。自身の作品に登場する黒人女性たちについて、Marshall は次の点を強調する。

They [the women in my novels] are not victims. On one hand they are oppressed women, they have to go out and do the menial work and they are insulted and humiliated and so forth, but their whole way of reacting to that, their whole ability to find means of giving vent to their anger and frustration, their ability to exercise a kind of control of their lives, even if it's through talk, suggests that they're not victims. (Bröck 62, emphasis added)

Marshall は、黒人女性に対する抑圧があることを端から否定したり、そうし



た状況を描くことそのものを批判しているのではない。ここで主張されているのは、抑圧された状況や心理描写に焦点が当てられることが多かった従来の小説とは対照的に、抑圧に立ち向かう黒人女性の姿勢、身動きできない困難な状況下でも力強く前向きに生きようとする姿に着目しているという点である。このような意識が反映されることで、誰しもがもちうる精神的な弱さと強さの両面を備えた黒人登場人物の個性が印象づけられ、更にこうした試みが、結果として小説全体を生き生きとしたものにしていくことは、以下に述べるように作品の端々で見られる。<sup>17</sup>

*The Chosen Place* では、活動的な様相とは対照的に刻々と変化する Merle の複雑な心理状況が描かれている。彼女は、バルバドス経済の中核を担う富裕層と保守的な農村 Bournehills の人々の、双方の立場を理解して両者の関係を取り持つという重要な役割を担う。例えば、島の開発計画のあり方を巡っては、産業や観光の誘致を進めようとする有力者たちに対し “Things are no different. The chains are still on. [. . .] Haven't you fellows in Legco learned anything from all that's gone on in this island over the past four hundred years? Read your history, man!” (210) と、奴隷制時代とさほど変わらない島内のポストコロニアル的な構造を直視すべきであると主張し、Merle は頑なに譲らない。その一方で、自身の生い立ちやイギリスにいた頃のトラウマは消化できないままであり、時に精神的に落ち込み塞ぎ込んでしまう。特に、農民たちの生計に関わるサトウキビ搾汁機の修理を直訴する場面では、Merle は工場の経営側が全く取り合わない状況に対して “one of her long, frightening, cataleptic states during which she was more dead than alive (398) という精神状態に陥ってしまうのであった。こうした豊かな人物像を描写することへの Marshall の追求は黒人女性登場人物にとどまらない。逆境に立たされた村の男たちは、不器用ながらも Merle の心情を察する優しさを持ち、時には支配勢力に対して反撃をも厭わない気質も兼ね備えているのである。<sup>18</sup> Marshall はとりわけ従来の偏った黒人女性像について指摘したが、それまでの大半の黒人登場人物に関する描写が、概して一辺倒であったりステレオタイプ化されてしまう危険もあった。だが彼女が試みたように、個々のアイデンティティや複雑な心情がつぶさに表現されることで初めて、社会的弱者というベールに覆い隠されることなく、生身の人間としての個性が浮かび上がってくるのである。

*Praisesong* には、Merle より年長の中年黒人女性 Avey が、旅先のカリブの島で半生を振り返った後、伝統的なダンスの意義を悟る様子などが描かれている。デパートの姿見や列車の窓に映った自分の姿に度々“a long confused moment” (48) をもつという心理描写に象徴されるように、アメリカでの Avey の生活は、彼女の内面と外面が乖離した状況にあった。カリブへの船旅の途中でついにそうした精神状態に耐えられなくなった彼女は、空路でアメリカへ戻ろうとカリブの島で下船する。だが、港は故郷の島へ帰省しようとする人々で溢れかえっていると同時に、自分が見知らぬ人々から気軽に挨拶される状況も相まって“something of the hallucinatory cast” (70) を見るほどのパニック状態に陥ってしまい、また喉の渇きを癒そうと水を求めた海辺のラムショップで、老人のぶっさら棒な対応に狼狽してしまう。だが、老人の“beyond mere sight and ways of knowing that outstripped ordinary intelligence” (172) を備えた言葉の要らない眼差しに対して、彼女は心を開き始め、里帰りへ同行し人々との交流を通して自分を取り戻していくのである。最後に、先祖たちに捧げる人々の儀式的な踊りを傍観していた Avey がついに立ち上がり、そこに踊りの輪が近づいてくる場面は、“Finally, just as the moving wall of bodies was almost upon her, she too moved — a single declarative step forward. At the same moment, what seemed an arm made up of many arms reached out from the circle to draw her in” (247) と描写されている。これは、彼女が幼少時にハドソン川での船旅で感じた“the threads didn't come from her, but from them, from everyone on the pier, including the rowdies, issuing out of their navels and hearts to stream into her as she stood there” (191) という見知らぬ人々との繋がりを体感した記憶と類似しており、この結末では、自発的にダンスに加わろうとする Avey が島の人々の輪に取り込まれるという描写を通して、アフリカン・ディアスポラとしての相互的な共感が表現されているといえる。本作品のプロットは、Avey 同様にグレナダからキャリアークー島への人々の里帰りに同行した Marshall 自身の体験とともに、ダンスや音楽の類似性はアメリカ黒人とカリブ黒人が同じ祖先をもつことを示している、という強い実感から生まれたようだ。<sup>19</sup> これまでに得た経験や心情、過去の物語などを、Marshall が歳を重ねるごとに見つめ直し作品にも取り入れることで、小説に登場する黒人女性たちの多様な個性も、ますます豊かなものとなるのであろう。この物語では、奴隷制度の副産物と

して残されたカリブ黒人の文化伝統が、アメリカ黒人のものと共通している点も強調され、こうした共通項を悟った Avey が心理的に昇華される物語となっている。つまり、この二つのブラック・ディアスポラを「二元的」に捉えるのではなく、「架け橋」となりたいという Marshall 自身の姿勢が、ここにも実現しているのである。

## おわりに

黒人芸術のあり方について Marshall は、“not only to survive, but to remain responsive, creative beings whose ability to transform our suffering into art — listen to the blues, to the wit and irony of the earlier Sparrow calypsos — attests to the fact that we have kept our humanity intact. [. . .] We are forever transcending our condition. It is this I want to celebrate” (“Shaping the World of My Art” 106) と述べている。奴隷制による強制移住とともに、アフリカから “poet’s skill” や “centuries old oral mode” (103) をも携え、アメリカでは抑圧による苦痛を芸術に変えてきたという見解を示す Marshall の思考と創作には、親交のあった Hughes が活躍したハーレム・ルネサンス以来続いてきた、開放的な黒人芸術の特長に加え、奴隷制によって離散したアフリカン・ディアスポラの見地もみられる。と同時に、アフリカ系アメリカ人という範疇を超えて、世界中の虐げられた人々の平等を追求する姿勢からは、後に高まったフェミニズムや、続くポストコロニアリズム、ディアスポラに関連した問題意識を、彼女が早くから抱いていたことがうかがえる。しかし、グローバルな問題提起をも含む彼女の作品は、残念ながら新たな「アメリカ黒人文学」のかたちの一つとして歓迎されることはなかったようである。

更にいえば、少なくとも従来の偏った黒人女性像の払拭への挑戦は、「黒人女性作家」Marshall の功績として早くに評価されるべきではなかったのだろうか。より普遍的かつニュートラルなビジョンをもって創作活動を行うべきであると唱えた Marshall は、当事者だからこそ表現できる、人間として当然もちうる感情の豊かな黒人女性を描くことを試みたのであった。黒人女性として生を受けたのであるから、まずはその運命を最大限、肯定的に活かすべきではないかというのが、彼女の創作に対する根本的なスタンスなのである。

現代の黒人作家による創作では、人種が特定されにくい人物描写が試みら

れたり、批評においても、もはや黒人文学というカテゴリーで議論することそのものに疑問がもたれるなど、黒人女性文学が話題となった一時期からも随分と変化を遂げている。そういった意味で、黒人文学研究は新たな段階を迎えているといえるのかもしれない。しかしながら、これまでの黒人文学研究が十分に吟味されないままであるということ、即ち未だに偏りがみられるということは、今こそ見過ごされてはならないだろう。

無名に等しいほど埋もれてしまっていた Hurston が、彼女の死後、Walker によって発掘され再評価されたのはご承知のとおりである。作品が発表された時代に社会の要請とは一致せず、見過ごされたままの作家を地道に発掘していくこともまた、今後のアメリカ黒人文学研究への一つの糸口となるのであり、Paule Marshall もその一人である。

## 註

- 1 この論文は、1965 年に行われたパネルセッションに端を発している。当時の活動については、例えば Edward Smethurst の *The Black arts Movement*, pp.119-20 に詳しい。
- 2 本論では主に黒人という表現を用いるが、アフリカ系カリブ人やバイジャンとの区別が必要な場合には、アフリカ系アメリカ人と記す。
- 3 セカンド・ルネサンス以降の黒人文学活動の変遷については、例えば *Soul Clap Hands and Sing* の Darwin T. Turner による前書き、あるいは Robert Stepto による解説を参照されたい。
- 4 若い頃に参加した団体名として、Marshall は AYD (American Youth for Democracy) や the Association of Artists for Freedom and Concerned Mothers for Justice などを挙げている (*Triangular Road* 7)。
- 5 白人至上主義者によるこの悲惨な事件は、公民権運動に一層拍車をかけることとなった出来事として有名であるが、Merle はこの事件で犠牲となった少女たちを、離れて暮らす同じ年頃の娘と重ね合わせている。また、この事件について Morrison は、公民権運動期に撮られた学生たちの写真に文章を添えた *Remember* の最後の頁で、彼女たちの写真の下側に “Things are better now. Much, much better. But remember why and please remember us” と記し、続いて “Their lives short, their death quick. Neither were in vain” (72) と添え、この本を犠牲となった四名の少女たちに捧げ

- ている。事件後間もなく過酷な人種差別の状況に対する怒りが記された *The Chosen Place* と、それから約半世紀を経た Morrison の献辞に至るまでの時間的経過には、人種差別撤廃への苦悩の道程が読みとれ、またいづれの作家にも、母親の立場から子供を思う切実な感情が表れている。
- 6 Smethurst も同様の指摘をしている。
  - 7 黒人文学の研究や取り扱いに関する諸問題が、必ずしも過去のものではないということを、我々は心に留めておくべきであろう。荒このみは、あるアメリカ文学事典に掲載されている文学作品の偏向に言及し、「これは驚愕すべき事態であるばかりでなく、恐怖すら覚えさせるのである。そしてマルティカルチュラリズムが、大きな声で唱えられる中で、アフリカン・アメリカン作家による文学作品の評価・受容の偏りは、今日にいたっても解消されることなく続いている、という現実を、ここでも私は実感するのである」(3) と述べている。
  - 8 その旅行の後も Hughes が死去するまでの二年のあいだ、Marshall は彼と連絡を取り続けており、彼から執筆活動の後押しを受けていた。
  - 9 ベイジャン・コミュニティとアフリカ系アメリカ人コミュニティというダブルスタンダードのもとで育った幼少時代 (Russell 78)、アメリカ英語よりもバルバドス人が話すキングズイングリッシュを誇りに思っていた母 Adriana (*Triangular Road* 65)、「西インド諸島のユダヤ人 (“the Jews of the West Indies”）」と呼ばれるほど儉約家であるベイジャンの人々 (*Triangular Road* 86-87) についてなど、Marshall が言及する二つのコミュニティの相違点は興味深い。なお、先に挙げた「黒人芸術運動」による *The Chosen Place* への言語の使い方に関する批判は、ここで Marshall 自身の発言によって論破されている。当時、たとえアメリカ黒人内部の多様性が認められなかったとしても、バルバドスが1966年の独立に至るまでの長きにわたりイギリスの統治下にあったことを考慮して、この点は黙認されるべきであっただろう。逆にいえば「黒人芸術運動」は、それほど厳しく統制されようとしていたとも考えられる。その他、ブルックリンでの生活や環境の変遷、ベイジャンとアフリカ系アメリカ人との関係性については、Marshall の “Rising Islanders of Bed-Stuy” に詳しい。
  - 10 こうした Marshall の主張は、その他にも多くの対談録で見られる。
  - 11 「カリブがエキゾチックで奇妙で特異」な場所として他者化されることも

また、Marshall にとっては理解に苦しむところであり、カリブ地域に関しても、エキゾチックにではなく実社会が描き出されるべきだと主張している (Ogundipe-Leslie 36-37)。

- 12 Marshall, *Triangular Road* に詳しい。
- 13 両作品に描かれたアメリカ黒人社会の閉塞感は、先に考察した 1960 年代以降の黒人社会や文化的状況を鑑みれば、容易に想像できるかもしれない。
- 14 Bernhard Melchior は、登場人物は Marshall 自身の経験を通して生み出されており、かつアメリカ黒人と西インド諸島人の特色を併せ持つ、という幾つかの先行研究を挙げて分析している。
- 15 *Freedomways* は 1961 年から 85 年まで刊行された、黒人の政治や文化、芸術に関する機関誌であり、著名な黒人たちが名を連ねた。
- 16 この“dog”という言葉そのものも、気がかりな表現である。例えば Frederick Douglass の自伝において、残酷な女主人が女奴隷に対して“Move faster, you *black gip!*” (39) と罵りながら、繰り返し鞭打つ場面がある。“gip” (“gyp” もしくは “jip” とも綴る) は「雌犬」という意味であり、一つには主人の命令に従って働くということであるが、女奴隷に多く子供を産ませて奴隷の再生産を行う、あるいは女主人側の嫉妬心も考慮すれば、容易に男性と関係を持つという意味合いも含まれているといえよう。Bessie が Bigger のために尽くす、あるいは彼女が Bigger に関係を強要されている場面などを鑑みると、黒人男性が黒人女性の存在を軽んじている様子が、この言葉からも読みとれるのである。
- 17 女性の地位に対する意識についてアメリカより遅れをとっていたカリブ地域でも、1970 年代後半から女性主体の運動が高まり始め、貧困であっても被害者意識に甘んじることなくポジティブな姿勢であるべきとの声があがっていった。例えば、カリブ女性作家と運動の変遷を論じた Louis James の著書に詳しい。
- 18 村人たちが変革に抵抗する様子を “Close the West out until you’re strong enough to deal with them on an equal level. That’s why the Bournehills people are so stubborn and far seeing” (Veaux 46) と Marshall は説明する。弱者であっても対等の立場を得ようとする村人たちの果敢な姿勢を、彼女が意識して描いたことが分かる。また、作品が発表された時期にカリ

ブ地域で男女対等の関係が成り立つか否かはさておき、少なくとも人物の多面性を描くという点においては、従来の黒人文学に対する新たな試みといえるだろう。

19 Marshall, *Triangular Road*, pp.140-47 を参照されたい。

#### 引用文献

- Baer, Sylvia. "Holding onto the Vision: Sylvia Baer Interviews Paule Marshall." *Women's Review of Books* 8.10(1991): 24-26. Rpt. in Hall and Hathaway 116-23.
- Bone, Robert. *The Negro Novel in America*. 3rd ed. New Haven: Yale UP, 1966.
- Brathwaite, Edward, "West Indian History and Society in the Art of Paule Marshall's Novel," *Journal of Black Studies* 1.2 (1970): 225-38.
- Bröck, Sabine. "Talk as a Form of Action: An Interview with Paule Marshall." *History and Tradition in Afro-American Culture*. Ed. Günter H. Lenz. Frankfurt: Campus Verlag, 1982. Rpt. in Hall and Hathaway 59-71.
- Brown, William Wells. *The President's Daughter*. 1853. London: X P, 1995.
- Christian, Barbara. "The Race for Theory." *Feminist Studies* 14.1(1988): 67-79. Rpt. in *The Black Feminist Reader*. Ed. Joy James and T. Denean Sharpley-Whiting. Malden: Blackwell, 2000. 11-23.
- Collins, Patricia Hill. *Black Feminist Thought: Knowledge, Consciousness, and the Politics of Empowerment*. 2nd ed. New York: Routledge, 2000.
- Dance, Daryl Cumber. "An Interview with Paule Marshall." *Southern Review* 28.1(1992):1-20. Rpt. in Hall and Hathaway, 96-115.
- Dickstein, Morris. *Gates of Eden: American Culture in the Sixties*. New York: Basic, 1977.
- Douglass, Frederick. *Narrative of the Life of Frederick Douglass, an American Slave*, 1845. *Autobiographies*. New York: The Library of America, 1994. 1-102.
- Graulich, Melody and Lisa Sisco. "Meditations on Language and the Self: A Conversation with Paule Marshall." *NWSA Journal* 4.3(1992):282-302.Rpt. in Hall and Hathaway 130-50.

- Hall, James C. and Heather Hathaway. "The Art and Politics of Paule Marshall: An Interview." Hall and Hathaway 157-88.
- , eds. *Conversations with Paule Marshall*. Jackson: UP of Mississippi, 2010.
- James, Louis. *Caribbean Literature in English*. London: Longman, 1999.
- Marshall, Paule. *The Chosen Place, the Timeless People*. 1969. New York: Vintage, 1992.
- , "From the Poets in the Kitchen." *Reena and Other Stories*. New York: Feminist, 1983. 1-12.
- , "The Negro Woman in American Literature," *Freedomways*, 6.1(1966): 20-25.
- , *Praisesong for the Widow*. New York: Plume-Penguin, 1983.
- , "Rising Islanders of Bed-Stuy: the West Indian Zest to 'Buy House' Rejuvenates a Community." *The New York Times Magazine* 3 Nov. 1985: 67, 78, 80-82.
- , "Shaping the World of My Art," *New Letters* 40 (1973): 97-112.
- , *Triangular Road: A Memoir*. New York: Basic Civitas, 2009.
- Melchior, Bernhard. *'Re/Visioning' the Self Away from Home: Autobiographical and Cross-Cultural Dimensions in the Works of Paule Marshall*. Frankfurt: Peter Lang, 1998.
- Morrison, Toni. *Remember: The Journey to School Integration*. New York: Houghton Mifflin Co., 2004.
- , *Tar Baby*. 1981. New York: Plume-Penguin, 1982.
- Ogundipe-Leslie, 'Molara. "Re-creating Ourselves All over the World: A Conversation with Paule Marshall." *Moving Beyond Ourselves II: Black Women's Diasporas*. Ed. Carol Boyce Davies. New York: NY UP, 1994. Rpt. in Hall and Hathaway 31-39.
- Pettis, Joyce. "A Melus Interview: Paule Marshall." *MELUS* 17.4(1991-92): 117-29. Rpt. in Hall and Hathaway 84-95.
- Russell, Sandi. "Interview with Paule Marshall." *Wasafiri* 8(1988): 14-16. Rpt. in Hall and Hathaway 77-83.
- Smethurst, James Edward. *The Black Arts Movement: Literary Nationalism in the 1960s and 1970s*. Chapel Hill: U of North Carolina P, 2005.



- Stepito, Robert B. "Black American Literature at Year 2000: A New Presence."  
*U.S. Society & Values* 5.1(2000):26-31.
- Turner, Darwin T. Introduction. *Soul Clap Hands and Sing*. By Paule Marshall. 1961. Washington, D.C.: Howard UP, 1988. xi-xlvi.
- Veaux, Alexis De. "In Celebration of Our Triumph." *Essence* 10.1(1979) Rpt. in Hall and Hathaway 40-53.
- Walker, Alice. "Saving the Life That is Your Own: The Importance of Models in the Artist's Life." 1970. *In Search of Our Mothers' Gardens: Womanist Prose*. San Diego: HBJ, 1983. 3-14.
- Wright, Richard. *Native Son*. 1940. New York: Harper, 1989.
- 荒このみ『アフリカン・アメリカン文学論—「ニグロのイデオム」と想像力』  
東京大学出版会、2004年。
- 市田良彦、ポール・ギルロイ、本橋哲也著、小笠原博毅編『黒い大西洋と知識人の現在』松籟社、2009年。
- 加藤恒彦、北島義信、山本伸編著『世界の黒人文学—アフリカ・カリブ・アメリカ』鷹書房弓プレス、2000年。